

2020年3月15日 礼拝説教要旨
詩編講解説教7 「主のもとに逃げる」
詩編7：2-10、Iコリント10：13

新共同訳聖書では1節として小見出しのような部分があり、この詩についての説明があります。「シガヨン。ダビデの詩。ベニヤミン人クシュのことについてダビデが主に向かって歌ったもの」「ベニヤミン人クシュ」というのは実はよく分からないのですが、多くの注解書がこれはサウルがダビデを執拗に追跡したサムエル記上19章以下の物語を背景にした歌だと解釈しております。その追っ手の中にベニヤミン人クシュがいたのでしょうか。ですから2節の「追い迫る者」というのはまさしくサウルとその家臣たちであり、追手を逃れ苦境に立たされるダビデの苦しみがこの詩には表されているのです。

ダビデにとって、それは理不尽なことでした。サウルに対して何か不正を働いたわけでもない。貶めたわけでもない。それなのに憎まれ、攻撃される。わたしたちもこれまでの人生の中でそういう経験があるかもしれません。人から妬まれることもあるでしょう。いわれのないこと、身に覚えのないことで悪く言われたり、根拠のない噂や陰口などが聞こえてきて、気分を害することがあります。何とか誤解を解きたいけれども、どうすることもできない。ムキになって反論すればするほど言い訳がましく聞こえてしまう。だから何も言えなくなる。そういう悶々とした気持ちを抱えながら一人悩み、夜も眠れないで過ごすという経験はないでしょうか。

そしてそういう時にわたしたちの心に湧き上がる感情は何より怒りではないかと思います。身に覚えのないことで悪く言われて、怒らない人はおりません。そんな理不尽なことがあるか。納得できない。この怒りを誰かにぶつけなければ気が済まないのではないのでしょうか。その感情がよく表されているのが7節です。「主よ、敵に対して怒りをもって立ち上がり」（7節）神さまが怒ってくださいと言っておりますが、これは何よりダビデ自身の感情の表れと理解してもよいでしょう。しかもこれはかなり激しい怒りの感情であります。新しい聖書協会共同訳ではこの7節を「主よ、立ち上がってください。怒りに燃えて。身を起こしてください。私を苦しめる者に激しい憤りを持って」と訳しています。

今日は少し「怒り」について考えたい。自分自身の生活を振り返れば、わたしたちも怒りの感情を持つことがしばしばあります。思い通りにならないことにイライラしたり、人の言動に思わずムカッとしたり。そういうことは日常茶飯事でしょう。最近はSNSなどで人と簡単につながるができる一方で、コミュニケーションが未成熟な状態だと、些細なすれ違いが誤解を生んで相手を攻撃したり、また顔が見えない分、その攻撃も激しくエスカレートしていきことがあります。それが今のいじめの背景にある。また虐待や煽り運転など、怒りの感情が抑えられず暴力的な行動に出ることがあります。それは大きな問題です。

一方で必要な怒りもあります。例えば、世の中のことに憤りを感じる。政治家に怒り、理不尽なこの世の現実怒りを覚えること。それは悪いことではない。必要な怒りです。そういう怒りがないと世の中は変わっていきません。昨年、国連で環境問題のことでスピーチしたスウェーデンのグレタ・トゥンベリさんの怒りのスピーチは話題になりました。経済優先で環境のことに目を向けない大人たちに対して「あなたたちを許さない」と涙ぐみながら怒りをあらわにした彼女の姿は印象的でした。ところがその一方で、この怒りを冷めた目で見ている大人たち

が少なからずいるという現実もあります。まだ幼い考えだとか、現実を知らないとか、大の大人がまだ10代の、こちらでは高校生の彼女に対して結構辛辣な批判の言葉をぶつけている。大人は平常心を装うという器用さを身につけているので、そういう怒りを真正面から受け止めないのです。そしてことば巧みに問題を言いくるめてしまう、あるいはネチネチと中傷の言葉で批判する。その内心に怒りを秘めている。でもそれが本当に大人の対応なのでしょう。

もしわたしたちが正しく怒るとしたらどうしたらいいのか。信仰者がこの怒りの感情とどう向き合うのかということです。まずここで注目していただきたいのは「わたしの神、主よ」と神さまへの呼びかけが繰り返されています。2、4節。7、9節もそうですが、「主よ」と神さまに対する呼びかけが繰り返されます。ということは、この詩人は、その怒りの感情を神さまにぶつけているということ。自分の中で怒りを消化しようとするのではなく、神さまに怒りを預けているのです。やり場のない怒りというものがあります。この怒りを誰にぶつけたらいいのか。信仰者にとってそれは神さまなのです。神さまにこの怒りの感情を打ち明けられることができます。それは幸いなことではないでしょうか。自分に溜め込むのではない。

そして2節で「あなたを避けどころとします」とあります。直訳すると「わたしはあなたの中に逃げ込む」となります。怒りの感情を持って一人悶々とするのではない。わたしたちはその怒りを持ったまま神さまのところに逃げ込むのです。その根拠が10節に「心とはらわたを調べる方、神は正しくいます」とあります。神さまにこそ正しさがある。ここは重要な言葉で通常「義」と訳す「ツァディーク」という言葉が使われています。わたしたちはしばしば自分の中の義、正しさの中で人を裁き、怒りに燃えるのです。でもそれは時に間違った方向に向かってしまう。感情的になり、收拾がつかなくなる。でも信仰者にとって、その正しさの基準は神さまにあるのです。神さまこそ正しいお方であり、そこに全ての基準がある。そこを忘れてはならない。その神さまの正しさの中に預けてしまう。

ローマの信徒への手紙に「愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい」（12：19）とあります。自分だけの正義感で行動する時にわたしたちはやはり間違ってしまう。言わなくてもいいこと、しなくてもいいことをしてしまう。かえって相手を傷つける。怒りの応酬が起こる。それは歯止めが効かない。ヤコブ書には「人の怒りは神の義を実現しない」（1：20）とあります。結局、わたしたちの怒りに正しい怒りというのはないのです。どんなに正義感に燃えても、それは限界がある。だから神さまの中に逃げ込むのです。神さまの正しさの中へ。いやむしろそこに逃げ込む時に、わたしたちは神さまの正しさの中で正しく怒ることができる。この世の不正や悪に対して怒り、毅然と立ち向かう勇気はわたしの正義ではなく、神さまが与えられるのです。

そして同時に忘れてはならないのは、そのように誰かに対して怒りを燃やし、正義感に溢れているそのわたしたち自身が罪ゆえに神さまの怒りを受けるべき怒りの子だということです。神さまの正しさ、義にてらした時に、わたしたちは決して人を断罪したり、裁くことなどできないのです。そしてわたしたちに向かうはずの神さまの怒りはイエス・キリストに向けられました。その怒りを負ってキリストは十字架におかかりになりました。ロマ書にあります。「今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」（5：9）ここに赦しがあるのです。そのような神さまの愛の中でこそ怒りは鎮められるのです。